

東南アジア学会第 107 回研究大会 シンポジウム「東南アジアの国民国家を問い直す」
亜細亜大学アジア研究所市民講座「アジアウォッチャー」との共催

趣旨説明 増原綾子（亜細亜大学国際関係学部 教授）

報告

1. 片岡樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授）
2. 池田一人（大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 准教授）
3. 大泉啓一郎（亜細亜大学アジア研究所 教授）

討論

1. 左右田直規（東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授）
2. 佐々木拓雄（久留米大学法学部 教授）

【要旨】

趣旨説明（増原綾子）

東南アジアでは、古来より独自の特徴をそなえた伝統国家が存在したが、西洋列強による植民地支配の過程で近代的な国家が移植され、それに基づいて独立後に国民国家が建設された、と論じられてきた。しかしながら、西洋の近代的な国民国家像が想定する統治能力の高い「国家」や均質的な「国民」は、果たして東南アジアにどの程度存在しているといえるのだろうか。東南アジアにおける「国家」と「国民」の実態はいかなるものであろうか。本シンポジウムでは、この問題提起に基づいて、文化人類学、歴史学、アジア経済論の研究者による、前近代・近代・現代それぞれの視角から、東南アジアの国民国家の再検討を試みる。現在、国民国家体系に基づくグローバルな国際秩序が動揺し、西洋的な近代国家モデルや国民国家観そのものの相対化が進んでいる。それらをひな型として形成されてきた東南アジアの国民国家をいま一度、振り返って捉え直したい。

報告 1（片岡樹）

「東南アジア国家はどの程度東南アジア的なのか？」

近代国民国家論の古典ともいえるべきアンダーソンの『想像の共同体』は、西洋における中世的帝国の分解に近代国民国家のモデルを求めた。その一方、東南アジアの前近代国家は、このモデルの鏡像として構築されてきた。国境概念の不在や重層的に配置される主権などがその典型例である。しかし近年の近世西洋史における礫岩政体論を新たに考慮に入れると、近代的ネーションの母体はむしろ礫岩状に重層的に配置された主権によって構成

される諸政体だったこと、つまり東南アジア前近代国家の特徴と大差ないものであったことが明らかになる。またこの視点から見れば、東南アジアの植民地化は、むしろ欧州の礫岩的伝統を移植したものということすらできるかもしれない。ならば土着の礫岩の上に外来の礫岩が被覆した東南アジア国家の特徴とは何であり、そこにはどのような課題があるのか。それを本報告では考えたい。

報告 2（池田一人）

「ビルマ・ナショナリズム再考：ネイションの失敗とミャンマー民族問題史」

独立 77 年が経ったいま、ミャンマーにおけるネイション形成の失敗は明白であり、そしてミャンマー史学はその史的過程について十全な説明を怠ってきた。独立ミャンマーを長年苛ましてきた民主化と民族の双子の政治問題は、その失敗を端的に体現していよう。民主化問題は 1962 年以來のネーウィン軍政に端を発しているのに対して、民族問題は植民地時代の英国による分割統治政策に起源があるとされる。これは本当か。「民族」はミャンマー史学の一大問題領域であり、植民地史学とビルマ・ナショナリズムの 2 つの民族史観の相対化が喫緊の課題だ。本発表ではこれを前提に民族問題の歴史について取り上げ、「第三世代」のタキン・ナショナリズムにミャンマーの民族問題の起源があり、独立後のネイション形成に失敗したという歴史像を提示したい。論点は、第一に分割統治起源説の誤謬、第二にタキンによるネイション形成の失敗の史的過程、第三にタキン史観による民族失政の隠蔽過程、の 3 点である。

報告 3（大泉啓一郎）

「東南アジアの福祉国家と国民国家」

本報告は、東南アジアの福祉国家化の観点から「国民国家」を問い直す。

西欧では「国民国家」が自生的に形成された後、その国民統合を強化する道具として「福祉国家」が発展した。これとは対照的に、東南アジアの国民国家は、植民地支配の境界線を継承して成立したため、多様な民族を内包する「複合国家」という性格を持った。国民統合の道具としては、経済成長を優先する「開発主義」が優先された。

1997 年の通貨危機以降、国民皆社会保障制度の必要性が認識された。しかし、西欧で国民国家の再編と福祉国家の危機を招いた新自由主義型グローバル化は、東南アジアでは大都市優先の成長戦略と巨大なインフォーマル部門の存続要因となった。

東南アジアの福祉国家化は進んでいないようにみえるが、その前提となる国民国家のあり方と変容の質が、西欧とは大きく異なるものであり、むしろ独自の福祉国家化の道を歩んでいると考える。